

日本多施設共同コーホート(J-MICC)研究
平成23年度 第1回 外部評価委員会 議事録

日時:平成24年3月2日(金) 14時00分～16時30分

場所:名古屋大学医学部 基礎研究棟1階 会議室1

出席者(敬称略): 富永祐民(委員長)、飯沼雅朗、齋藤英彦、森際康友、佐尾重久
(以上、委員)

主任研究者:田中英夫、

事務局:浜島信之、若井建志、内藤真理子、森田恵美、銀光、川合紗世、

岡田理恵子、田村高志、中川弘子、杵野純一郎 計16名

欠席:三木健二(委員)

1. 平成22年度第1回 外部評価委員会の議事録の確認

中央事務局(若井)より、前回の委員会の議事録について説明がなされ承認された。また主任研究者より、前回の委員会での指摘にもとづいて今年度研究組織が取り組んだ改善点等について、ベースライン調査参加者の増加のための方策、研究成果の論文発表の経過と見通し、ホームページの改善点、社会的諸問題検討委員会の討議内容と、今年度をもって委員会を廃止すること、国際化に関しては、国際学会や国際雑誌への発表をもってすすめていくことなどの概略が説明された。

2. 委員の交代について

主任研究者より、平成23～24年度の外部評価委員(外部団体推薦)に、愛知県医師会より飯沼雅朗委員を再度ご推薦いただいたこと、また愛知県弁護士会より佐尾重久先生をご推薦いただいたため、前任の村橋泰志委員から佐尾委員に交代となったことが報告された。

3. ベースライン調査の進捗状況

中央事務局(銀光)より、ベースライン調査の進捗状況について、現在約5万9千人が参加しており、これに連合を加えると8万人を超えることが報告された。また現在までの参加者数の推移や目標数に対する達成率などをグラフで示した。委員より、前年度に示された表に比べて分かりやすくなったが、さらに外部評価委員会の位置づけを示す図(J-MICC 研究組織図)や、研究全体の長期計画の表も付け加えることが求められた。

4. 第二次調査の進捗状況

中央事務局(若井)より、現在5地区で第二次調査が開始されており、参加率は約7割

と高く、平成 23 年 12 月末で約 7 千 5 百人、連合を合わせると約 1 万 9 千人の参加が得られていることが報告された。

5. 追跡調査について

中央事務局(若井)より、死亡、転出、がん罹患について調査中であることが報告された。委員より、がん罹患の把握の精度を上げるために努力すべきであること、死亡小票では罹患情報は得にくいので、がん罹患情報は別で把握する必要があること、レセプト情報が将来的に活用できるかもしれないので情報を得るべきであることなどの意見が示された。これに対して中央事務局より、追跡調査のワーキンググループを中心に、精度の高い追跡調査のあり方を検討し、運営委員の間で情報共有していく旨の発言がなされた。

6. 愛知県がんセンターでの倫理審査状況

主任研究者より、愛知県がんセンターでの倫理審査承認状況について、食品摂取頻度調査票の妥当性・再現性に関する研究についての承認を得られたこと、ベースライン調査の 1 年間の延長、社会的諸問題検討委員会の廃止などについても承認を得られたことが報告された。委員より現在の同意でシーケンスを用いた研究は可能かとの質問を受け、主任研究者より多くの既知の遺伝子多型を測定するゲノムワイド関連解析は可能だと理解しているが、未知の遺伝子多型もあつかうシーケンスはまだ決まった見解は無く、独自研究としてそのための同意をとっている地区もあると回答した。また委員より名古屋大学と愛知県がんセンターでの倫理委員会の構成などに差異はあるかとの質問があり、再度調べて回答することとなった。

7. 各種委員会開催状況、研修・サイトビジットの実施状況

平成 23 年度は通常開催の委員会に加え、食事調査や追跡調査のワーキンググループ会議を開催したこと、また、新規に研究を開始した静岡・桜ヶ丘地区、京都フィールド3、第二次調査を開始した高島研究、静岡地区に、研修やサイトビジットを行っていることが報告された。

8. 山形大学グローバル COE との連携について

主任研究者より、山形大学グローバル COE プログラムが 2010 年より開始した「山形分子疫学コホート研究」において、調査票などの研究計画・手順を可能な限り J-MICC 研究と共通化し、将来の共同研究を容易にする基盤を整備していることが報告された。また、名古屋大学が担当する静岡地区・大幸研究の生体試料が現在すべて名古屋大学内に保管されているため、リスク分散のためその一部を山形大学で保管していただくことになっていることが報告された。委員より自治医科大学のコホートとの連携は考え

ていないのかとの意見が出され、中央事務局は、同コホートがゲノムを扱っていたかどうかを確認すると回答した。

9. 横断研究の進捗状況

中央事務局(浜島)より、横断研究についての進捗状況が報告された。平成20年度に4519人に対し108の遺伝子多型を測定し、日本人のデータベースと大きな差異がないことが確認され論文として発表されたこと、現在39のテーマが承認され、うち4編の原著論文が発表されていること、さらに357の遺伝子多型の解析が終わっており、今後21のテーマに対し論文作成が進められていくことが報告された。また血漿約3000人分で葉酸、ビタミンB₁₂、総ホモシステインを、閉経後女性の血清約800人分を用いて性ホルモン測定を終了していることも報告された。委員より論文掲載時に研究費の記載を忘れないようにとの指摘があり、これについては中央事務局が、共著者の決定時に確認していると回答した。また多くの研究成果が出るのはいつ頃かとの質問があり、主任研究者が、横断研究については今年あたりから論文発表数が増加しはじめること、また、追跡情報を用いた研究成果については、ベースライン調査終了後5年後以降になると考えられると回答した。

10. 学会発表および論文作成状況

中央事務局(川合)より、欧文の原著論文はJ-MICC研究で7編、うち横断研究で5編、独自研究で13編、合計20編が発表されていること、学会発表は128になることが報告された。委員より学会発表の数に比べて論文発表の数がとても少ないことが気になるとの印象が示され、学会発表にとどまらず論文文化していくために、サポート体制を組むことが望ましいとの意見が出された。これに対し主任研究者より、横断研究の成果は概して原著論文として採用されるハードルが高いこと、それであるが故に投稿から採用までの査読者とのやり取りの過程の情報を共有化し、採用までの時間を短縮していけるように全体会議でも話し合っていきたいとの発言がなされた。

11. 研究ホームページの改訂について

中央事務局(内藤)より、ホームページの改訂をおこない、トップページを魅力あるものにしたこと、J-MICC Plusというページを新たに作成し、公表された論文の要旨を発表していることが報告された。また三木委員の京都大学で行った講義の内容を参考にして、主任研究者の挨拶文を推敲し、一般の方に分かりやすくしたことが報告された。

12. その他

委員より検体の劣化が今後心配されるとの質問があり、これに対して中央事務局(浜島)より、コントロール検体を条件を変えて保管してあるので、定期的に測定しながら検

体の劣化がないかを確認していくとの回答がなされた。また委員より今後J-MICC研究が重要な研究として活動を継続し、成果が発信されていくためにはどうしたらよいかとの質問がなされた。これについて、主任研究者より、分子疫学コホートの大規模なものは国内では J-MICC 研究が最初なので、同研究組織が率先して国内の他のゲノムコホートの研究者との情報交換と交流を深めて信頼関係を構築していくこと、山形大学グローバルCOEとの連携は、その一例であること、これらによって将来のオールジャパンとしての大規模な統合解析を可能とすることで、海外の大規模なゲノムコホートに対抗できるようにしておくとの見解が示された。最後に、齋藤委員、富永委員長から、本研究組織は全体として良く運営されているとの感想が述べられた。

以上